

〈研究ノート〉

中国人日本語学習者の促音の知覚について

—日本語母語話者との比較—

任 星

キーワード：中国人日本語学習者，促音，知覚，アクセント，後続子音

1. はじめに

日本語学習者にとって、特殊拍の知覚と生成の問題は以前から指摘されており、例えば「切って」が「切て」に、「来て」が「来って」となる特殊拍の脱落や挿入が起きることが知られている（戸田 1998, 2003 など）。本研究では特殊拍のうち、促音を対象とし、日本語母語話者（以下母語話者）および中国人日本語学習者（以下学習者）が知覚過程において、促音語と非促音語を聴き分ける際に何を手がかりにしているのかを明らかにする知覚認知実験を行った。

2. 目的と手順

実験目的は次の3点に定める。1) 母語話者と学習者の間に、2モーラ音と促音を含む3モーラ音の判断境界値に差があるか否かを調べる。2) 母語話者と学習者それぞれの促音の知覚について、アクセントの違いが2モーラ音と促音を含む3モーラ音との判断境界値に影響を及ぼすか否かを明らかにする。3) 閉鎖持続部分に後続する子音の音声的特徴によって、促音の知覚に差があるか否かを明らかにする。

刺激音のモーラ数は、2モーラ（非促音）と3モーラ（促音、以下Q）に限定した。日本語の促音は子音 /p,t,k/ の前に多く現れ、促音と非促音の閉鎖持続時間の比率は調音点により異なると指摘されている（渡部・平藤 1985；Han 1992）。本研究では、子音 /t/ のみを取り上げ、母音は生来的（intrinsic）な長さが最も長い /a/ に限定した。アクセント型は平板型と頭高型を用いた。なお、アクセントは各刺激音につき、平板型と頭高型を用いたので、対象語は合計4種類（/tata/ ベース平板型と頭高型 + /taQta/ ベース平板型と頭高型）である。次に、東京方言話者に刺激音のみ（単語レベル）と刺激音をキャリアセンテンス「これは_____と読みます」に入れて（文レベル）ポーズを入れずに自然に調音させたものを収録した。

単語レベル：4種類×24段階（閉鎖持続時間の長さ）×3回＝288音声

文レベル：4種類×24段階（閉鎖持続時間の長さ）×3回＝288音声

アルカディア社製音声波形分析ソフトAcousticCore 7で、刺激音について、それぞれ閉鎖部を、70msから300msまで、10msずつ変化させ、24段階の刺激音を作成した。同じ刺激音を3回繰り返し、ランダムに並べ替え音声ファイルを作成した。実験で用いた総刺激音数は以下の通りである。

被験者：母語話者（東京方言話者，大学生・大学院生）10名

学習者（北方方言話者，上級日本語学習者，大学生・大学院生）10名

被験者に促音知覚に関する調査であることを告げ、刺激音声はヘッドフォンで両耳呈示し、聴き取った音声を前の刺激と比べずに促音の有無を判断し、回答用紙に「促音がある」と聴き取った場合は「○」を、「促音が無い」と聴き取った場合は「×」を記入するように指示した。一種類の刺激音には24段階の音声があるが、聴き終わった後に休憩を入れた。

3. 結果と考察

表1 判断境界値（非促音語）

母語	アクセント型	単語レベル (ms)	標準偏差	文レベル (ms)	標準偏差
日本語	平板型	166.06	1.07	121.00	3.22
	頭高型	154.04	2.23	111.08	1.56
中国語	平板型	138.50	22.95	113.92	11.67
	頭高型	131.10	24.31	100.22	7.63

表2 判断境界値（促音語）

母語	アクセント型	単語レベル (ms)	標準偏差	文レベル (ms)	標準偏差
日本語	平板型	160.52	3.37	120.62	1.50
	頭高型	144.74	1.63	102.26	2.08
中国語	平板型	138.84	20.46	112.34	6.33
	頭高型	127.82	22.70	91.72	5.42

表1と表2は知覚範疇境界値の平均値を示したものである。アクセント型の違いによる影響があるか否かを比較したところ、被験者の母語、「単語レベル」・「文レベル」に関係なく、頭高型が平板型より知覚判断境界値が短いことが分かった。単語と文の場合は、単語の方が文より長くなっている。母語話者別に比較すると、学習者は母語話者に比べ、より短い閉鎖持続時間で促音があると判断していた。このことは、学習者によって調音される促音の閉鎖持続部分が、促音としては短すぎる傾向にあることを裏づけるものではないかと考えられる。

個人別の結果を分析すると、学習者の判断境界は、比較的揃っている母語話者に比べ、かなりばらつきが大きいことが分かった。これは他の何らかを手がかりに促音であるか否かを判断していることになる。母語話者はモーラの持続時間を主な手がかりにして、促音を判断しているが、学習者はモーラの持続時間より、促音に後続する子音の有気音から無気音に変わる音声的特徴の違いを手がかりに判断していることが窺える。

参考文献

戸田貴子（1998）「日本語学習者による促音・長音・撥音の知覚範疇化」『文藝言語研究：言語篇』33，筑波大学文芸・言語学系，pp.65-82.

戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7 : 2. pp.70-83.

渡部真一郎・平藤暢夫 (1985) 「二音節語における無声破裂音と促音の判断境界と先行母音の長さの関係」『音声言語 I』近畿音声言語研究会, pp.1-8.

Han, M.S. (1992). The timing control of geminate and single stop consonants in Japanese : A challenge for nonnative speakers, *Phonetica* 49, pp.102-127.